

弊社製品のバージョンアップポリシーについて

弊社は最新セキュリティトレンドやウイルストレンドにより、製品アーキテクチャ/製品ラインの変更を実施する事がございます。また各バージョンリリース時点において、既定設定値の更新が行われる事がございます。その為バージョンアップや後継の製品ラインへの乗り換えにおいて、機能差異や動作差異が発生する事がございます。稼働中のプロダクション環境への影響を懸念される場合、お手数ですがテストバージョンアップ等の検証を行って頂く事をおすすめいたします。弊社ではバージョンアップによるプロダクション環境への影響有無等は保証する事はございません。

メイン機能のセキュリティ担保

基本的に弊社製品のデフォルト設定は、セキュリティトレンドに最適化された状態でリリースされております。セキュリティを担保するメイン機能(リアルタイムスキャン/ディープガードの有効/無効等)について、バージョンアップを期に大きく変更された実績はございませんが、ソフトウェアの詳細な振る舞いについては、ウイルストレンド変化により通知なく変更される可能性がございます。これはウイルストレンドの急激な変化により、自動アップデートチャネル配信等を通じ、通知な更新が実施される為となります。

ウイルス検知時のオペレーションをマニュアル化している場合、それらに応じてオペレーションも更新いただく必要性がございます。マニュアル化されたオペレーションはウイルス製作者の絶好のターゲットにもなり得ます。ご理解いただけますと幸いです。

ユーザ設定値の扱いについて

弊社製品のバージョンアップにおいて、同一機能/同一設定についてはユーザの設定値が引継がれます。これは弊社製品の設定値のスロット(OID)がインクリメント式で記録されており、ユーザが自身で設定を行った設定値については上書きしない形でバージョンアップ後の設定値反映を行う為です。しかし弊社では各バージョンリリース毎に機能調整を行っており、それにともない旧バージョンの設定値スロットが廃止され、新しい設定値スロットが追加される事があります。その場合はユーザが追加設定(インクリメント)した値であっても、次バージョンの製品で使われなくなり、追加された設定値スロットの初期値が反映されます。メイン機能についてはこのような大きな変更はありませんが、かならずしもすべての値が保持されるということではございませんのでご了承ください。

製品アーキテクチャの更新について

弊社製品は製品ライフサイクル(Version別EOL)とは別に製品自体の終息を決定し、後続製品として異なるアーキテクチャの製品を発表する事がございます。その場合、上記の”ユーザ設定値の扱いについて”は考慮されず、ユーザの実現させたいセキュリティを後続製品において新たに構築する必要があります。これもウイルストレンド動向変化に対応する為の製品開発活動の一環となりますのでご了承ください。

例)

Linux Security 11.xx 以前	→ Linux Security 64
Threat Shield	→ Internet Gatekeeper
仮想スキャンサーバ	→ Atlant